

仇穀

繪本四季物語

後編

三

913.5

工

後編 3

報仇四季物語後編卷之三

遠州日阪住於浪花耶人亭

栗杖亭鬼卯著

東武震士遊浪速客舎之日

山東京山校

○第十五齣

盤井ふとくひき老雅
老狐ふたび盤井が救

おも盤井い嵐山利貫と二世の約はな一助太刀の

事なたのとも強くぬかれはるる子、教よのぼる。

母妹よわうりあひ、歌の形を尋人とあうるに曾え

と方さしてゑどくろふ涼意にのそあつて、後より一里

のちゆもせざる婦人なまはだに足が痛め休まがら

の旗をまげん事いふ事どりけ日もふ西ふく
日新ふふくゆりふふんと杖と力ふたごのわたり
女中まじく待たまふけいといふ聖としてお路のふ
なりやうてけたまふ事のもどりや酒もまて送べし
といふ。盤井も幸なりとやふふ事。伊勢海道に
上方としておむりなるふふ事。久望の松原に
やふふ事。兩人盤井中ふ引ひささ。られ女中
けねふへはとあり。一換子なる事なり。けねふ
眼張たる代おいやとありても無とありても古市へ

傾城もふふ賣渡す。命とく。わんとして。
勅々奉云。錢さるべ。おお仲るふ見入ら
ま。ころいささ。この不運なり。是よりや罪人。
古市へ送るなり。とありいづけなき。廻る。盤井へ
係。更して。なる。け。時に。弱。て。え。せて。悪。うり
なんと。やう。より。強。く。と。ね。い。さ。ふ。く。の。事。なり。
やつむ。り。か。ま。一人。強。い。と。る。女。や。さ。つ。女。中。に
あふ。へ。さ。う。と。ね。と。や。罪。の。人。に。さ。め。人。所。人。
め。り。て。刀。を。突。き。さ。り。男。を。人。へ。送。人。と。り。て。嵐。山

指持のほふふにけしとて大なる事——
ぬゝぬゝ人々もさるるに——
——行かざる者——
たうと張路あるふに——
あふと河川をたまたまに被服人等とす
前尾に——
——
——
——
——

浪人朝雲の浪人——
監獄おもふに——
——
——
——
——
——
——
——
——
——



んせー西もろろ。そふぬ家狂馬命ぬるものと
いらにもふ詮新てもそあふけもどきようんと
あつたぬ。修珠とさるべーと。ねりひのかの一とよみ下
どもねび。そまの一段の事なり。然らば千切屋の能
屋へ極むべーと。お十郎常と立て。お市へまこえ。
能屋まで。五年季。石西はさへり。盤井女付新に注お
右市ハお玉。おふも并ぶ。番量あらどま。お市も大
ひはねび。お十郎ととま。く。養無。盤井女付新に注お
改り。お出ー。より。お流新。おて。能屋に客の注るい

なうろろ。それどもけま。聖人の足ぬるよ。有と
え。喰ひ。能揚。おおのか。おま。おと。い。そうに。新
二三十ねの。あぶら。と。お。個へ。一。おに。お。人。ま。ど。初。の
何。ど。い。た。も。お。ろ。ろ。く。お。身。は。便。判。た。く。お。を
さ。て。も。お。へ。お。く。お。一。た。よ。に。も。や。ら。す。い。や。ー。と。女
お。い。る。と。お。福。ー。か。ー。お。も。お。ろ。ろ。と。お。能。屋。の
お。ま。ま。一。回。へ。お。と。ま。く。お。見。ー。お。お。ま。ま。と。ま
と。せ。二。三。日。の。お。ま。ま。ー。お。ろ。ろ。と。ま。く。お。折。ふ。ー。有。の
ぬ。と。お。ま。ま。お。ろ。ろ。あ。げ。の。い。ろ。ろ。の。お。ひ。お。あ。い。と。と。つ

かゝる。幼十郎も折ふ。あり。ま。聖。女。
多。お。と。り。入。り。て。金。銀。財。宝。一。つ。も。な。し。
大。き。き。と。り。て。や。い。人。さ。ら。で。い。と。得。利。し。る。
豈。斗。ら。ん。や。盛。城。の。首。領。さ。ら。ん。と。い。ひ。幼。十。郎。が。
右。衛。尉。よ。麻。生。川。小。左。衛。尉。と。い。つ。も。老。あ。り。力。量。
人。小。を。ぐ。と。角。力。と。ぬ。も。お。ま。ぬ。る。き。ふ。家。侍。取。
娘。は。終。に。角。力。と。ぬ。り。て。ど。れ。よ。名。た。る。か。老。
小。ぞ。あ。り。る。は。な。い。大。岡。山。七。五。郎。と。い。は。麻。生。川。
小。左。衛。尉。よ。て。お。ま。ぬ。り。と。同。と。の。名。と。神。話。い。こ。と。

つ。て。は。は。ど。ん。何。も。名。代。の。名。人。な。ま。さ。に。皆。く。
け。角。力。と。ぬ。り。と。い。ひ。し。る。を。り。る。今。角。力。の。名。を。
形。づ。ら。両。国。の。七。五。郎。小。左。衛。尉。も。仲。屋。へ。ま。り。一。就。
汲。人。と。興。隆。と。い。ふ。に。ま。り。幼。十。郎。も。は。市。
小。左。衛。尉。と。い。ふ。は。又。合。ご。い。小。左。衛。尉。と。い。ふ。と。や。幼。十。
郎。と。い。ふ。と。一。列。の。跡。を。の。情。状。の。べ。互。ひ。の。名。の。う。え。
を。得。る。小。左。衛。尉。と。い。ふ。は。盛。城。の。首。領。と。い。ふ。と。も。
ま。り。今。は。汲。人。と。い。ふ。は。細。柳。の。指。南。針。と。い。ふ。と。も。
お。ま。ぬ。り。と。い。ふ。は。相。違。の。接。接。と。い。ふ。と。や。酒。と。汲。人。と。七。五。

島よも引合せ女島共と云ふまゝにまづのけし
 けなせし盤井。似味よりうてはくくく。愕然とれ
 どもきい。うさうさうさ。同じく人目のまじ。
 何とぞ人さき。何とぞ。付かか。いさ。と。千に
 うさ。似味。さ。さ。と。と。盤井。へ。小左。つ。相方
 へ。例。似味。ま。七。三。帝。い。ひ。と。もの。眼。み。て。情。と
 通。ど。れ。ど。も。盤井。へ。さ。め。人の。如。き。さ。う。う。さ。ん
 と。して。さ。う。さ。う。さ。う。さ。う。さ。七。三。帝。大。い。に。さ。う。
 お。く。さ。女。さ。う。さ。う。金。五。十。兩。出。し。班。家。と

と。う。い。ま。ま。の。か。た。ら。い。な。ま。し。す。月。も。さ。め。中
 似味。と。さ。う。さ。う。と。して。さ。う。さ。う。さ。う。さ。う。さ。
 小。左。つ。酒。十。も。小。さ。う。と。奥。ど。の。こ。ろ。右。市。に
 新。画。と。して。さ。う。の。形。似。味。子。は。罵。さ。う。の。流。け
 ま。ば。さ。う。い。の。肩。似。味。石。灯。籠。と。さ。う。扇。似。味。さ
 して。痛。く。大。王。さ。う。と。ま。く。さ。う。と。奥。ど。の。こ。ろ。
 幼。十。も。奥。に。さ。う。相。方。の。女。帝。と。付。ひ。一。回。は
 入。お。さ。う。死。生。似。味。か。う。う。せ。裸。體。と。さ。う。十二。い。と

嵐山 麻生川 相撲

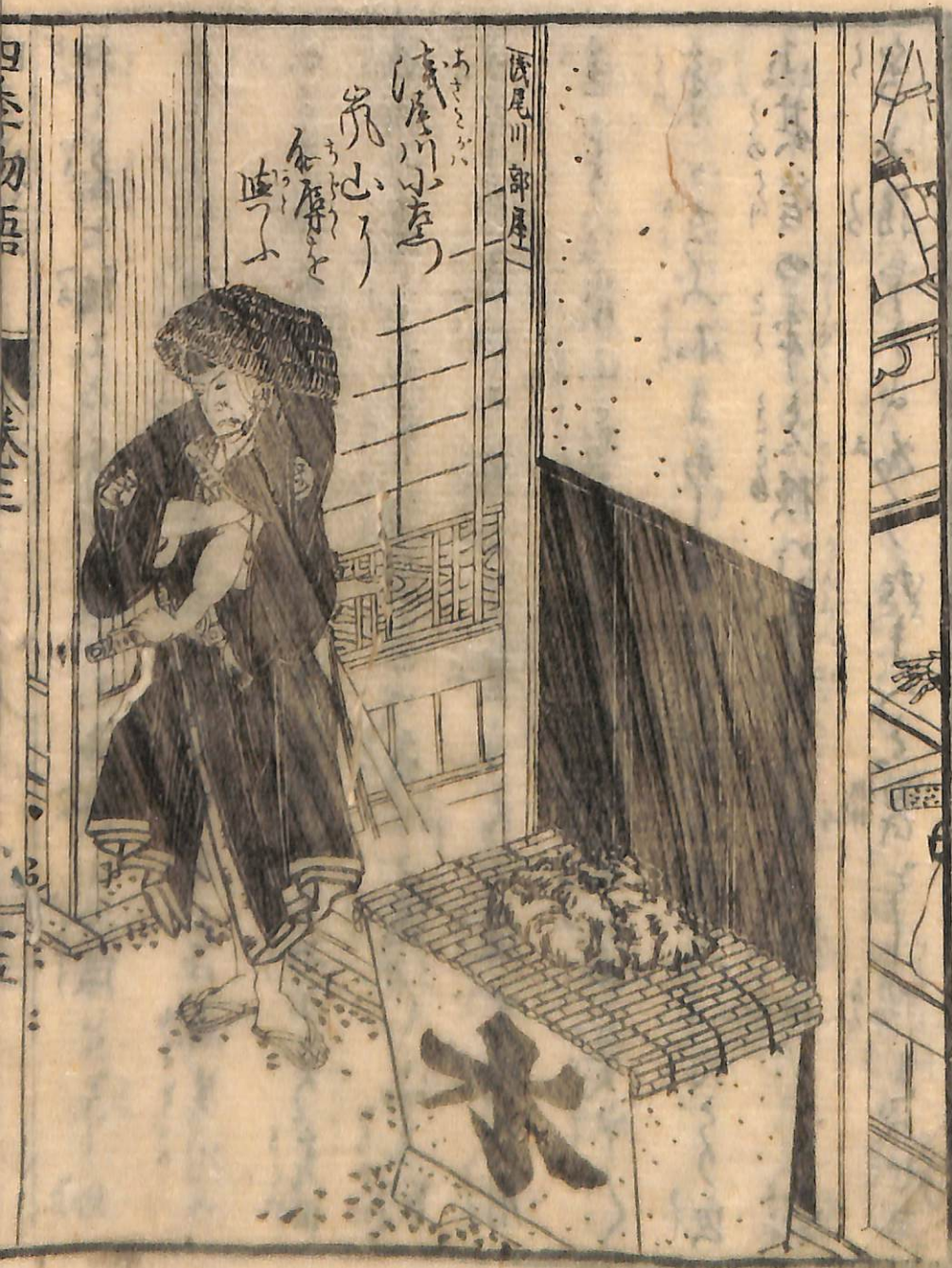


な侍の事さまで出するは、いふに、
あうー、聖に下し、さう、三金の、魔、何、中
むつて、ば、情、負、人、と、判、の、を、事、
父、も、去、思、お、う、城、は、路、を、金、石、西、
黒、人、と、あ、り、う、は、角、力、に、市、に、は、
金、に、は、り、石、の、金、に、
角、力、は、大、坂、名、代、の、
人、も、さ、来、な、
奥、山、聖、土、儀、を、

け、と、七、三、
お、の、
ま、の、
ら、の、
大、國、の、
こ、つ、と、
あ、ら、
ふ、
角、力、
麻、生、川、

そこへ小兵もきどもふぐとありてふとくろく山
七三郎の三ヶ峰もあつたまどき兵部答もくべ
いくからん肥へば疲へばふかき男ぶつたもべ
新角かき組へ今一番の圓角力とけづは春ど
見おとむるふへ白木のまきに金子百両系土儀の
中へ連へし角力麻生川とけられは徒見物
付成そろへ揚負もきぬ圓角力ふ余りする仕方
嵐山負まくとどろよりくに七三郎もはきとてを
ふふおひのねふ人のするあふんはいう仕方今へ

うへへとて土儀のま中へ埋んで呉んと怒り
いやく大車は新むと角力の一あなど負へて
付強の事あらんとをきぬあはれと土儀へよう
麻生川小左まつて百両成眼よりけ揚て呉んとか
足踏ならし行司の圓扇は行やいな双方一あより
組だり七三郎へ負るもきぬ徒見お嵐山すけな
くどつて時へは惜し力足踏と連せば麻生川危く
とあるまうとふりひ連して負んとふりふと麻生川は
たつと押かりける事三に及べば徒見おの解が



負かしと強き人ふとせし人の肩の口喘に頼も
 せぬ事以たのそといひ。角力と云ふこと。月後痛し
 たとへ其えの如き。若草角力二人三人をとりしとて
 りの教とて。麻生川にわづれば。跡よ。お十郎ハ右
 傍輩の。あのお家来をめて。促る事。ならん。ま
 其方へ。うかつ。おちと。ぶき。と。声。き。に。い。ふ。と。お。す。即
 も。鳴。も。ふ。と。たり。門。口。お。ま。ま。お。ハ。嵐。山。は。お。家。来。の。と
 け。じ。り。お。た。ま。つ。小。教。し。ま。ま。お。ち。も。お。た。ま。つ。お。ん。座。を。伺
 じ。お。家。来。借。て。ぞ。お。め。と。る。七。三。郎。ハ。お。ま。ま。お。と。て。お。ち。も

何。ん。下。ま。い。あ。や。り。情。な。さ。お。あ。の。お。家。来。の。と。り。と
 ず。お。さ。の。い。な。ら。ぬ。お。ま。ま。い。と。さ。ま。ま。く。お。ち
 下。お。た。の。し。や。な。ら。ぬ。ん。又。叶。ハ。と。も。男。が。め。は
 ち。お。さ。げ。て。の。教。と。て。お。ち。不。便。と。ね。ば。し。め。し。お。ち。し
 ぐ。と。さ。ら。ば。お。ち。と。せ。く。の。お。ち。と。て。お。ち。と。て。お。ち。と。て。お。ち
 ふ。た。の。も。ろ。と。て。お。ち。と。て。お。ち。と。て。お。ち。と。て。お。ち。と。て。お。ち
 か。よ。し。も。土。儀。の。ま。中。へ。埋。ん。ど。お。ち。と。て。お。ち。と。て。お。ち
 き。の。人。と。し。た。と。て。お。ち。と。て。お。ち。と。て。お。ち。と。て。お。ち
 幼。十。郎。ハ。向。後。行。挽。又。お。ち。男。の。ま。ハ。金。輪。在。彼。が

字成守とこノ一と五内一と小たつと一徳小五
んも拘るくまううななと系級とさしと時や
けるふ鹽井ハ鹽久堅ふて危難又遠くきども白狐
ふつらま道に急くふ足の痛といよ一基あ一足
引きねば園の旅筆屋は匠面しとさめく養生
とるふくわうずま月斗も園の宿ふりて新ほ色し
けまば宿のまふ厚く礼備しとあはは枝成力
ありろぐたうりきくふあはは又ふ今三ヶの
津小隠まなと嵐山が通るぞと町中門は出で

保むるまなまは鹽井ハか娘くえ通るに系
そふお系来るい列人ならず嵐山七と希るは
井大は収び夢をわけ今我うたさふすやぬあ
又成いとめ園の宿ま月斗もあうてやうく今
目立出一とろとつふと士と希も馬うりあたり
あははきさふ一とろとつふと士と希も馬うりあたり
おひひ一とろとつふと士と希も馬うりあたり
石波の宿へ来るは又宿扇屋は互ひのきとねび
右市ふて白狐は鹽井といひ一とろとつふと士と希も馬うりあたり

右を屋のねまの事と修りいへく道まの市
 東みらんとんねあし麻生川氏新て恥辱と
 一伴と。修りもさく修りなれば盤井はさか合せ有難
 内志し。修りとしも力氏係くたびたまへと石段の扇
 屋の喜うとたのしと修りとねしと修りといへく。修り
 長あまのふいあらねども。石段の扇ふて新橋といへく。

報仇四季物語後編卷之三終



